梶井基次郎

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終えつけていた。と言おうか、嫌悪と言おうか　　酒を飲んだあとにがあるように、酒を毎日飲んでいるとに相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果したカタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行っても、最初の二三小節で不意に立ち上ってしまいたくなる。何かが私をらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

－23－

だかその頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壞れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親したしみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋がいていたりする裏通りが好きであった。雨や風がんでやがて土に帰ってしまう、と言ったような趣のある街で、が崩れていたり家並が傾きかかっていたり　　勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるようながあったりカンナが咲いていたりする。